

## やまゆりポークを小学校に寄贈 ～生産者が畜産業の授業を実施～

やまゆりポーク生産者協議会（事務局：J A全農かながわ）と平塚市畜産会養豚部会は、2月22日、平塚市立なでしこ小学校（松原政夫校長）に県産銘柄豚「やまゆりポーク」ロース肉26キロを寄贈した。この日贈られたのは、地元の平塚市岡崎の（有）グリーンファームで生産された「やまゆりポーク」で、生産者の小泉英明さんが金子誠教育長に目録を手渡した。平塚市内小学校への市内産豚肉の寄贈は6年目。

これに合わせ、児童に地元畜産業について理解を深めてもらうため、小泉さんや県畜産技術センター、全農かながわ畜産部、東日本くみあい飼料の職員らが、同校6年生86名に市内の畜産業について学ぶ「特別授業」を実施した。小泉さんが「やまゆりポーク」の生産から出荷までの仕事や、飼養管理や衛生管理などを生産農場の映像を交えて説明した。小泉さんは「子豚は弱い生き物なので、健康に成長しているか毎日観察して育てている。肉も野菜も食べ物は手をかけて育てられ、我々は命の恵みを頂いている。日頃お店に並んでいる食べ物がどういう経緯で届くのか知ってほしい」と呼びかけた。

また、全農かながわ職員が「やまゆりポーク」の特徴について、県農業技術センター畜産技術所の職員は平塚市内の畜産業の概要や、畜産業が循環型農業に果たす役割などを紹介した。

特別授業の後、寄贈された「やまゆりポーク」を使った「ふれあい給食」（＝地場産の食材を使った給食を生産者と一緒に食べる事を通し、地域の文化や農畜産漁業を理解し、食べ物への感謝を学ぶ）が実施され、生産者の小泉さんや養豚関係者らが児童と一緒に、「やまゆりポークの香味焼き」など特別メニューを味わった。養豚農家の話を直接聞ける貴重な体験とあって、児童達は「豚を育てる時に一番大変な事は何か」「嬉しいのはどんな時か」など、給食中も活発に質問していた。

同校6年生の杉崎大洋さんは「事前に『やまゆりポーク』について調べ、農林水産大臣賞の受賞や、特別な配合飼料で育てていると知り、給食を楽しみにしていた。今後は、県産や市内産の食べ物に関心を持ちたい」とお礼を述べた。他の児童は「普段、何気なく食べていた物に多くの手間がかかっているとわかった。これからは残さず大事に食べようと思う」と話した。

やまゆりポーク生産者協議会では、地元で豚肉が生産されている事や、地元産お肉の美味しさを知ってもらうため、今後も県内小学校への豚肉贈呈や食育授業を実施する予定。



生産者の小泉さんが養豚の仕事について授業を実施



「ふれあい給食」で児童と生産者らが交流